歴史地理学　61－1（291）147-148　2019. 1

総括：「海からの歴史地理」の成果と課題

井　村　博　宣

本シンポジウム「海からの歴史地理」は，河原典史（立命館大）をコーディネーターとして，第13回大会共同課題「海洋・海岸の歴史地理」（『歴史地理学紀要』13巻，1971）の成果を踏まえたうえで企画した。「海洋・海岸の歴史地理」では，生産・流通の場となる海洋と生活の場となる陸上とを相互に検討する歴史地理学のアプローチが芽生えてはいたものの，その後約40年を経たこの平成末に至るも，研究の進展は遅々として進まなかった。そこで本シンポジウムでは，史資料，時間や人的な制約があり，すべての研究領域を扱うことは到底叶わないため，まずは河原・井村のオーガナイザーで構想を立てた後，オーガナイザー，報告者，コメンテーターが一堂に会する研究会を2回開催して論点を絞り，「近世～近代における漁場利用の変化と人々の移動」，「近世～近代における海運とその変化」，「津波被災史研究と防災・減災への活用」，「近世～近代における海浜の活用」の4つのセッションを設ける内容構成にした。その成果は8編の充実した論考，各セッションに対する4編のコメント，そして総合コメントとして本特集号に収録されており，さらなるオーガナイザーからの詳細な総括は不要と思われる。そこで以下では，オーガナイザーの立場から，各セッションのねらいにかかわる内容に絞り，その成果と課題について簡潔にまとめたい。

第1セッションは，人文地理学において海を対象とした研究を進める場合の最も定番といえる漁業・漁村に関するオーソドックスな歴史地理学研究である。ただし，ここでのねらいは，同じ第一次産業にあっても，漁業は農業と異なり，まず生産の場となる漁場が立体的であること，またそれが魚種により，あるいは時代や季節により移動すること，さらにこうした漁場の特徴が陸上にある加工等の関連部門にも影響を及ぼすことを示す工夫を加えて問うたところにある。またコメントは専門領域の近い文献史学の専門家（非会員）に求めることとした。報告2編は，いずれも具体的な史資料に基づく実証的な研究であり，移動という視点，海からという視点，漁夫のライフヒストリーを用いた分析方法等は，文献史学にはみられない旨の高評を得た。歴史地理学が有する特色の一端を示せたものと言えよう。しかし，使用した資料に関する質問，取り分け分析結果の精度を高めるための補充資料を求める意見もいただいた。

第2セッションは，漁業（漁場）だけでない，海の空間利用として海運に関する研究で構成した。ここでのねらいは，海を陸地と陸地を結節する開かれた空間として捉え，その範囲が日本国内に留まらず海外へ，また国内でも臨海部（海）から深く内陸部（山）へと広がることを示すことである。産地から財の最終到達地まで地道なフィールドワークで追跡した報告は高い評価を得た。また，これまでの裏日本論，東北論に対して一石を投じる報告も得られた。さらにコメンテーターより日本海をめぐる空間論をご示唆いただいた。しかし，同セッションでも産業，物流を扱う以上，より具体的数値とまでは言わないまでも

補充資料を加えた論証が求められた。

第3セッションは，地学的な安定の時代が終焉し，まだ東北日本太平洋沖地震津波の被害が記憶に新しい今日をエポックと捉え，秋田での開催も勘案したうえで，ややもすれば忘れられがちな日本海側における津波とその被害に対する注意喚起，地域・人々の津波災害の記録・記憶を如何に後世へ伝えるか，そのなかで歴史地理学がどのような役割を果たせるのか，これらの再考を目指した。そこで本セションは，報告者，コメンテーターとも，敢えて全員非会員ながらこの分野を専門とする方々にご登壇いただいた。地質学の立場から，秋田・青森等における過去の津波の特徴を地層に残る痕跡より解明した報告があり，古記録の重要性と歴史地理学に対する期待が寄せられた。また防災地理学の立場から，退避行動や危険性の可視化の重要性が指摘された。とくに日本海側の能登半島以西は，地震・津波の特徴が太平洋側とは大きく異なり，モノによる対策ではなくて逃げるための社会やルールづくり等が重要で，能登以西では津波対策のあり方自体を考える必要性があるとの知見を得た。

第4セッションは，約40年前の共同課題では扱われなかった海浜の活用を，本シンポジウムにおいて新機軸として示した。一般的に海といえば大量に存在している水（海水）を想定するであろう。しかしここでは，海の器の部分，すなわち海水を湛えている海底（地下）や汀線付近に着目し，その活用例として海底資源の開発と海辺の観光・レクリエーション利用を取り上げた。コメンテーターは，海域利用，沿岸開発や海のツーリズム研究の専門家（非会員）にお願いした。秋田で世界初の海底油田の開発が進められた経緯や，名所図会にみる近世の海辺の観光・レクリエーション利用の研究成果を得た。コメンテーターからは，それぞれ将来展望を込めて石油以外の地下資源についての研究題材としての可能性や，社会経済的な影響の検討についての必要性が指摘された。

以上のように，概ね当初のねらいに沿った一定の評価は得られたと言えよう。ただし，個々の研究報告としては充実した内容ながら，海からの視点となると，十分に熟れているとは言えず，まだ検討し改善するべき課題が残っている。また，コメンテーターからの質問等は，分析に用いた資料の価値，その吟味や，複数の資料を用いた分析精度の向上にかかわる内容に集中している。筆者は，地域条件の差異が収益性の違いとして産業の立地展開に及ぼす影響を各経営体の経営収支等を用いて検討している。南出先生のご指摘のように，やはり歴史地理学においても，より客観的で説得力のある，金額・重量等の数値データ，もしくはそれに替わるなにかのデータが切望されるところである。なかでも海にかかわる資料は少ないと推測されるため，とくに経済事象を対象とする海の歴史地理学研究を進めるうえで，資料的な制約が前途に立ちはだかる壁であり，この宿痾的な難題の克服が待たれるところである。

（日本大学）